**受難節第２主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2024年２月25日**

**「熱心な祈り」**

**詩編５編２～４節**

**5:2 主よ、わたしの言葉に耳を傾け／つぶやきを聞き分けてください。**

 **5:3 わたしの王、わたしの神よ／助けを求めて叫ぶ声を聞いてください。あなたに向かって祈ります。**

 **5:4 主よ、朝ごとに、わたしの声を聞いてください。朝ごとに、わたしは御前に訴え出て／あなたを仰ぎ望みます。**

**使徒言行録12章１～５節**

 **12:1 そのころ、ヘロデ王は教会のある人々に迫害の手を伸ばし、**

 **12:2 ヨハネの兄弟ヤコブを剣で殺した。**

 **12:3 そして、それがユダヤ人に喜ばれるのを見て、更にペトロをも捕らえようとした。それは、除酵祭の時期であった。**

 **12:4 ヘロデはペトロを捕らえて牢に入れ、四人一組の兵士四組に引き渡して監視させた。過越祭の後で民衆の前に引き出すつもりであった。**

 **12:5 こうして、ペトロは牢に入れられていた。教会では彼のために熱心な祈りが神にささげられていた。**

　**「倦まず弛まず（うまずたゆまず）」という言葉があります。「飽きたり怠けたりせず」という意味です。「うまずたゆまず努力する」「うまずたゆまず早起きする」というような使われ方をします。あきたり怠けたりせずに地道にこつこつと努力をする。たとえその努力が周りの誰からも見てもらえなかったり、評価もされなかったとしても地道にこつこつと努力を重ねていくのです。**

**「小さなことからコツコツと」ではないですが、誰からも評価されないような小さなことをこつこつと努力を積み重ねていき、日々なすべきことをなしていくって私たちの人生においてとても大切なことだなと思います。それは勉強でも仕事でも家事でも育児でも看病でも介護でもそうだと思います。誰からも評価されなくても日々コツコツとなすべきことをなしていくのです。**

　**それは教会の歩みも同じだと思います。「うまずたゆまず」イエス様の十字架と復活の福音を宣べ伝え、愛の業に励んでいくのです。周りの人から見れば「もっと派手なイベントとかをどんどんやれば人が集まるのに」と思われるかもしれませんが、教会は毎週毎週晴れの日も雨の日も雪の日も、うだるように暑い日も凍えるように寒い日も、「うまずたゆまず」礼拝をして、賛美をして祈り、愚直なまでに福音を宣べ伝え、愛の業に励んでいくのです。**

**「神様は人を分け隔てなさらない。ユダヤ人も異邦人も同じように愛して下さり、全ての人の救いのためにイエス様は十字架に掛かって死んでくださった。イエス様は全ての人の救い主である」そのことに気づかされた最初の教会であるエルサレム教会に三度（みたび）迫害の手が及びました。アンティオキアではユダヤ人も異邦人も関係なく共に礼拝を守る教会が誕生し、さあこれから異邦人伝道へという矢先にエルサレム教会ではステファノの殉教後に起きたサウロたちによる大迫害に続き迫害にさらされたのです。**

**「そのころ、ヘロデ王は教会のある人々に迫害の手を伸ばし、**

 **ヨハネの兄弟ヤコブを剣で殺した。」と1節2節に記されています。**

**このヘロデ王というのはイエス様誕生の時にユダヤを支配していたヘロデ大王の孫で、ヘロデ・アグリッパ1世のことです。このヘロデ・アグリッパ1世がイエス様の最初の弟子で使徒の一人であるヤコブを剣で殺したのです。12使徒でないステファノの殉教の詳細があれほど丁寧に記されてあるのに、12使徒の一人でありエルサレム教会の最も重要な人物の一人であるヤコブが剣で殺されたことはたった1節で記されているだけです。**

**その深いところはわかりませんが、いよいよ迫害の手が使徒にまで及んだのです。エルサレム教会にとって非常に大きな痛手です。それだけにキリスト教会やキリスト者のことを良く思っていないユダヤ人からすると大喜びです。ヘロデ王はさらにユダヤ人に喜ばれようと思い、つまり自分の人気取りのためです。一種のパフォーマンスです。つまりヘロデは自分の人気を高めるためにさらにペトロにまで手を伸ばして捕らえて牢に入れたのです。そして過越祭の後で民衆の前に引き出して、イエス様をさらし者にしたようにペトロもさらし者にして、あわよくばユダヤ人の間から「あの男と同じように十字架につけろ！」と声を上げさせようとしたのと思うのです。これはペトロにとって、そして教会にとって絶体絶命の大ピンチでありました。**

**この大ピンチの時に教会は何をしたかと言いますと5節にありますように「教会では彼のために熱心な祈りがささげられていた」のです。ペトロを取り返すために武装してヘロデ王に向かったのではありません。牢屋に行ってペトロを助け出そうとしたのでもありません。「彼のために熱心に祈った」のです。この絶体絶命の大ピンチの時に教会はペトロのために熱心に祈ったのでした。**

**迫害された教会が捕らえられたペトロのために熱心に祈る、祈りの共同体の姿です。これまで困難な出来事に遭遇するたびに心を一つにして祈ってきた教会の姿です。恐らくは「ペトロが無事でありますように。守られますように」そのように教会が一つとなって熱心に祈ったのでしょう。**

**熱心に祈る、この言葉を聞いて私たちはどのような祈りを想像するでしょうか。熱心ですから、一生懸命に、汗を流して、熱い祈りをささげたのでしょう。「主よ、どうかお助け下さい」と声を大にして、叫び、涙を流して祈る人もいたでしょう。もしかしたら食事も取らずに寝る間も惜しんで声が涸れるほどに、意識を失うくらいに祈ったかもしれません。熱心に祈る、と聞くと私たちはそのような情熱的に祈る教会の姿を思い浮かべると思います。実際ペトロの命が危機にさらされているわけですからそれくらい情熱的な祈りがされていたのかもしれません。**

**熱心に祈るの「熱心な」と訳されている言葉は聖書のもとの言葉では「熱心に」という意味はもちろんありますし、他に「根気よく」とか「たゆまず」という意味があります。「うまずたゆまず」の「たゆまず」です。「飽きたり怠けたりせず」祈るのです。あきたり怠けたりせずに地道にこつこつと皆で祈りを重ねていくのです。24時間一睡もしないで情熱的に、ある種意識が朦朧としたように皆で祈るそのような祈りをするというよりは、むしろ皆でうまずたゆまず祈る、あきたり怠けたりせずに地道にこつこつと皆で祈りを重ねていく方がこの時の教会の姿なのではないかと思います。**

**そのうまずたゆまずの祈りというのは、誰もが「必ず神様がペトロを助け出して下さる」そのことを信じて、信頼する中で祈っていくのです。Aさんが祈る、次はBさんが祈る、その次はCさんが祈るという風に祈りの言葉を紡いでいき、うまずたゆまず祈っていくのです。**

**それは私たちの教会で毎週木曜日に行われている聖書研究祈祷会のような祈りではないかと思います。聖書の学びをして御言葉に耳を傾け、讃美歌を歌います。そして牧師から一人ずつ順番に祈っていくのです。Aさんの次はBさんが祈る。Bさんの次はCさんが祈るという風にです。祈る前に週報に記されている「今週の祈りの栞」の祈りの課題をあげます。課題以外でもこれは皆でお祈りすべきこととの判断で、とりわけ病の中にある方を皆で祈ります。今週の誕生日の方、受洗記念日の方を覚えて祈ります。次週の礼拝の事を祈ります。牧師のことも覚えて祈ってくださいます。そして何よりも皆で教会のことを祈るのです。教会のために祈るのです。**

**そのような祈りの会を私たちの教会では毎週行っています。それははたから見れば地味なことかもしれません。そんな数名で集まって祈ったところで小さなことじゃないかと思われるかもしれません。たしかに小さなことです。小さな祈りの輪です。それでも私たちは祈るのです。うまずたゆまず祈るのです。あきたり怠けたりせずに地道にこつこつと皆で祈りを重ねて、祈りの言葉を紡いでいくのです。教会は祈りの共同体だからです。神様の導きを信じて信頼して祈り続けていくのです。**

**ローマの信徒への手紙12章9～15節にこのように記されています（292頁）。**

**「 12:9 愛には偽りがあってはなりません。悪を憎み、善から離れず、**

 **12:10 兄弟愛をもって互いに愛し、尊敬をもって互いに相手を優れた者と思いなさい。**

 **12:11 怠らず励み、霊に燃えて、主に仕えなさい。**

 **12:12 希望をもって喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず祈りなさい。**

 **12:13 聖なる者たちの貧しさを自分のものとして彼らを助け、旅人をもてなすよう努めなさい。**

 **12:14 あなたがたを迫害する者のために祝福を祈りなさい。祝福を祈るのであって、呪ってはなりません。**

 **12:15 喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。」**

**これは使徒パウロが語る教会の姿であり教会に連なるキリスト者の姿です。12節に「希望をもって喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず祈りなさい」と記されています。希望を持ってたゆまず祈るのです。人間的に考えればとても希望が持てない状況であってもそれでもなお希望を持って、希望を捨てることなくたゆまず祈り続けるのです。地道にコツコツと祈り続けるのです。**

**ここで興味深いのが14節に迫害する者のために祈りなさいと書かれていることです。これってなかなかできることではありません。自分たちを迫害する者のために祈る、そんなの憎らしくてとてもできないことです。でも、この言葉をよくよく考えたらエルサレムの教会はペトロのためだけではなく、教会を迫害し愛するヤコブを殺害し、ペトロを捕らえてあわよくば殺害しようともくろんでいるヘロデ王のためにも祈ったのではないかと思います。ヘロデ王が誤った考えを捨てて神様に立ち帰るように。悔い改めるようにヘロデ王のためにも教会の皆でたゆまず祈り続けたのではないかと思うのです。**

**そして、どうしてそれができるのかというと、教会の誰もがイエス様に愛されイエス様に祈られ、イエス様の十字架の死によって罪赦されて生かされているからです。イエス様を裏切って逃げてしまった自分たちのためにイエス様は祈って下さり、そのような私たちを愛して教会の群れに加えて下さっている、その愛を知っているからなのです。**

**それは私たちも同じです。私たちもイエス様の十字架の死によって罪赦されて生かされて愛されているのです。イエス様は今も私たちのために執り成しの祈りをして下さっているのです。イエス様こそが私たちのためにうまずたゆまず祈り続けて下さっているのです。そのイエス様の愛にまた祈りに支えられているからこそ、私たちもまたうまずたゆまず祈り続けていくことができるのです。地味で小さなことのように見えるかもしれませんが、祈りの力はとても大きいものなのです。私たちはこれからも祈りを大切にして、うまずたゆまず地道にコツコツと祈り続けていきましょう。**